



まずジョレン（鋤簾）で平面的に掘り下げます。
まだ石はわずしか見えていません。



だんだんと石の配置が見えてきます。ここからは移植コテで慎重に掘り下げます。



配石遺構の全体像が見えてきました。

縄文時代後期の配石遺構群

今回発見された配石遺構群は、出土遺物の年代などからおおよそ縄文時代後期中葉～末葉にかけて作られたものと考えられます。配石に用いられた石（礫）は、ほとんどが凝灰岩と呼ばれるもので、遺跡の近くを流れる鈴川周辺から運びあげられたものと考えられます。石の総数は1,000個以上を数え、用いられた石の大きさは、長さ20cm強から1m弱に及ぶものまで様々です。ほとんどは自然石そのままですが、柱状に打ちかかれたものや窪み穴がけられたものなど、部分的に加工が加えられたものもあります。

配石遺構群を構成する石はただ集められたようにも見えますが、よく観察するとところどころに大きな石を立石状に配している様相がうかがえます。同じ伊勢原市内に所在する三ノ宮・下谷戸遺跡では、立石を中心に集中的に石が配置されている状況が確認されており、本遺跡の配石遺構も同様の形態を呈する可能性があります。他にも、石が組み合わせられたり、方形あるいは楕円形に並ぶもの、石が列を作っているような箇所が観察されます。

「配石遺構」の性格ははっきりしない部分が多いのですが、お墓であるとかお祭りの場所であったとする見解が示されています。今後、調査の進展に伴い、徐々にどのような場所であったのかが分かってくることでしょう。

配石遺構群全体を見るとブロック状に石が集まっている箇所があり、北西から東南方向に向かって石が列をなしているようにも見受けられます。この方角に何の意味があるかは分かりませんが、縄文人にとっては重要な意義があったのかもしれない。



凹穴を有する立石状の配石遺構



組石状の配石遺構



方形に並ぶ配石遺構



楕円形に並ぶ配石遺構